# 卒業生へのブックリスト

卒業生へのブックリスト

卒業・修了おめでとうございます。

これから新しい世界へ飛び出して行くみなさんへブックリストを作成しました。

20 代で読んで欲しい本や、社会に出る前に読んで欲しい本などを先生方に選んでいただきました。

ぜひ今後の読書に役立ててください。

みなさまのご活躍をお祈りしています。

近藤寛樹分館長（生命）のおすすめ

◆**「「邪馬台国」はなかった」** 古田武彦著　朝日新聞社 (210.2||F-1)

◆**『失われた九州王朝』** 古田武彦著　朝日新聞社 (210.2||F-2)

◆**『盗まれた神話』** 古田武彦著　朝日新聞社 (210.2||F-3)

◆**『古代史の十字路―万葉批判―』** 古田武彦著　東洋書院 (購入予定)

◆**『壬申大乱』** 古田武彦著　東洋書院 (購入予定)

本学の学生のような理系の学生には、人文社会科学系の学問は不得手であったり興味を示さない人が多いかも知れない。特に大学受験で“暗記科目”とみなされる歴史などの科目に痛めつけられ、敬遠する向きが多いように思われる。しかしたとえ技術者であっても社会から切り離されて存在できるわけではないことは自明であるし、現在（および将来）の社会が過去の歴史の延長上にあることは否定できないので、科学技術者にも歴史などに関する最低限の知識や関心は欠かせない。現代史については国内外で議論が沸騰しているところであるが、実は我が国の8世紀以前の歴史についても我々は大いなる錯誤の中にいるようである。それを鋭く問いかけるのが以上の古田武彦氏の著書である。古田氏は各種の文献や考古史料を厳密に分析することによって卑弥呼の時代（あるいはそれ以前から）7世紀末に至るまで九州王朝が存在したことを立証した。その結論は我々が教わった古代史の常識とは全くかけ離れていて、正に衝撃的である。そしてそこには単なる暗記科目ではない歴史を学ぶ楽しさが凝縮されている。実は門外漢の私も文系の学問は予め結論が決まっていて、論証はそれにつなげるための手段にしか過ぎないかのような印象をもっていた。しかし、古田氏の論証法はそれらとは全く異なり、証拠や事実に厳格に基づいて議論が展開される。従って、理系の人間にも下記の書物には抵抗なく入ってゆけるし、読み進めれば学問には理系も文系もないことが実感できることになろう。

下薗真一先生（知能）のおすすめ

◆**『ギリシャ悲劇Ⅰ　ソポクレス』** ソポクレス著　筑摩書房 (購入予定)

◆ギリシャ悲劇　ソポクレス、アイスキュロス、エウリピデス　の作品、全巻　筑摩書房 (購入予定)

◆**『ギリシャ喜劇ⅠⅡアリストパネス（上）（下）』** アリストパネス著　筑摩書房 (購入予定)

◆**『イーリアス　（上、下）』** ホメロス著　岩波書店 (081|| I-4-5||102-1/081|| I-4-5||102-3-B)

◆『オデュッセイア（上）（下）』 ホメロス著 岩波書店 (081|| I-4-5|| 102-4, /081||1-4-5|| 102-5)

◆『失楽園 （上）（下）』 ミルトン著 岩波書店 (081|| I-4-5||206-2)

◆『ご冗談でしょうファインマンさん』 R･P.ファインマン著 岩波書店(420.2||F-1||1/420.2||F-1||2)

◆『困ります、ファインマンさん』 R･P.ファインマン著 岩波書店 (420.2||F-2)

◆『かもめのジョナサン』 リチャード･バック著 新潮社 (933||B-21 本館所蔵)

◆『アルケミスト』 パウリ･コエーリョ著角川書店 (969.3||C-1)

小田部荘司先生(電子)のおすすめ

◆『ローマ人の物語 1～15』 塩野七生著 新潮社 (231||S-1||1～15)

ローマ史を扱った作品は実にたくさんあって名著も多いですが、訳本が中心なので読みにくいです。この塩野氏によるローマ史はひじょうに読みやすい。また現代の感覚からしても理解しやすい。地下鉄に乗っていたときにたまたま横にいた若い男性が、このシリーズのハンニバル戦記のところを読んでいたのを見ました。確かにあそこのところは素晴らしかったです。「The Emperor's Club(邦題:卒業の朝)」という映画は、米国エリート男子校でローマ史を教えている先生の話です。ここで先生は、ローマ史なんか役に立たないじゃないかという疑問に対して、ローマ史を勉強することにより民主主義がなんであるかというのがわかるというようなことを説明します。まさしくその通りで、歴史からいろいろなことを学ぶべきです。 2000 年以上も前の話なのに、全然古くさいなんてことはない。人間は何も変わっていないというのが良く分かります。

◆『新十八史略 1～6』 駒田 信二他著 河出文庫 (購入予定)

たまたま古本やさんで見つけて買って読んでみて、あまりにも面白いのでそれ以来何回も読み直している本です。特に1から3巻くらいまでの古代がひじょうに面白いです。中国では文字で記録することがきちんとされているので、よくもまあこのような話が詳しく残っているなぁと感心することしきりです。出てくる人物の個性が際立っており、またその行動が現代の感覚と全然ずれないこともあり、興味深いです。歴史だけでなく、儒学や老荘思想などについても人物を通しながら語るので、広く中国古典や故事を知ることができます。2000 年以上も前の話なのに、全然古くさいなんてことはない。人間は何も変わっていないというのが良く分かります。

藤原暁宏先生（電子）のおすすめ

◆**『うらおもて人生録』**色川武大　新潮社（購入予定）

「生きていくための技術」を学んだ本です

藤尾光彦先生（システム創成）のおすすめ

◆**『坂の上の雲』**　司馬遼太郎著　文藝春秋（913.6||S-30||1～6）

若かった頃のひたむきな日本が描かれています。

高橋公也先生（機械）のおすすめ

◆**『物理学とは何だろうか（上・下）』**　朝永振一郎著　岩波書店（081||I-1||85,/081||1-1||86）

科学の本質とその発展を深く知るには最も最適な本。

産業革命において技術と科学がどのように関連しながら発展してきたかを知ることが出来る。

◆**『ある気象学者の一生』**　藤田哲也著（451||F-1||A 他）

九工大(明専)出身でアメリカに渡り竜巻の研究をした世界的な気象学者の自伝

大石英貴先生（情報創成）のおすすめ

◆**『富の未来（上）（下）』**　トフラー，アルビン・トフラー，ハイジ著　講談社（304||A-9||1,/304||A-9||2）

これからは IT を使って消費者が企業の代わりに生産活動も行う、生産消費社会になります。さらに、消費者同士で無償で交換する非金銭経済も大きくなっています。IT の与える社会への影響について、歴史的な認識も踏まえた視点を備えた良書です

◆**『フラット化する世界［増補改訂版］（上）（下）』**　トーマス・フリードマン　日本経済新聞出版社（361.3||F-2||1/361.3||F-2||2）

グローバル化と IT によって世界中の人に機会が与えられるようになり世界がフラットになりつつあります。生活者としては便利になると同時に、働く社会人としては競争相手が増えます。日本国内のニュースでは伝えられない世界の変化の事例が満載の良書です。

石橋邦俊先生（共通）のおすすめ

◆**『楽は堂に満ちて』** 朝比奈隆著　音楽之友社　(762.1||A-1)

◆**『厄除け詩集』** 井伏鱒二著　筑摩書房　(911.1||I-1)

◆**『私の中の流星群』** 草野心平著　筑摩書房　(914.6||K-8)

◆**『孔子伝』** 白川静著　※『白川静著作集 6』(222||S-3||6)に収録

◆**『天に送る手紙』** 森敦著　小学館（購入予定）

◆**『戦艦大和ノ最期』** 吉田満著　講談社（購入予定）

◆**『古詩選』**（新訂中国古典選 13）　朝日新聞社　（082||C-1||13　本館所蔵）

◆**『荘子』**（新訂中国古典選 8,9）　朝日新聞社　(082||C-1||8,082||C-1||9　本館所蔵)

栗原好郎先生（共通）のおすすめ

◆**『病牀六尺』** 正岡子規著　岩波書店 (081|| I-4-3|| 13-2)

漱石の親友だった子規の最後の随筆です。脊椎カリエスのため病臥しながら、生きる喜び、そして悲しみを率直に綴ったものです。子規の苦しみをずらすテクニックを堪能して下さい。きっと、諸君らの人生の応援歌になります。

「ずらす」こと　　~正岡子規敵生き方~

「草花の枝を枕元に置いて、それを正直に写生して居ると、造化の秘密が段々分って来るやうな気がする」　　――『病牀六尺』より

明治 22 年 5 月 9 日、子規喀血。医師から肺病だと診断された子規は矢継ぎ早に四，五十句を作る。「卯の花をめがけてきたか時鳥」、「卯の花の散るまで鳴くか子規」など。時鳥も子規もホトトギスのことだが、肺結核の代名詞でもある。また卯の花には卯年生れの子規自身を仮託しているのは言うまでもない。肺結核という当時は死の病が自分に取り付き、自分は死ななければならないのか、という思いを込めた句だが、子規は余命 10 年を自覚する。したいこと、出来ることを優先し、生き急ぐ。喜怒哀楽の激しい子規は、見舞いに来た親友夏目金之助に、もう学問を止めて田舎に帰る、とこぼす。そこで夏目が一句。「帰ろふと泣かずに笑へ時鳥」と励ます。政治家になるのが夢だった子規は余命 10 年の自覚を得て、文

学で身を立てようとする。政治家は 10 年では大成しない。子規は結核に苦しめられながらも、俳句や短歌の革新運動に手を染めていく。しかし晩年は、結核菌が骨を腐敗させるカリエスが悪化し、背中や尻に穴が開き膿が出るまでになっていた。猛烈な痛みが体中に走り、普通だったらその痛みに耐えることだけに終始しそうなところだが、子規は違った。彼が亡くなる前年の明治 34 年に書かれた「墨汁一滴」という随筆の一節。「ガラス玉に金魚を十ばかり入れて机の上に置いてある。余は痛をこらへながら病床からつくづくと見て居る。痛いことも痛いが綺麗な事も綺麗ぢや」と。当時、子規は自分が勤めていた「日本」という新聞に日記のような随筆を書いていた。痛みに耐える子規の痛々しい姿だけがクロースアップされそうな晩年の末期的な病状だが、ちゃんと金魚の綺麗さにも目を配っている。生きるための知恵と言ってしまえば簡単だが、七転八倒の苦しみの中で病気以外のことを考えることは、そう生易しいことではないだろう。痛みをそらすことで一時、別世界に遊ぶ、いわゆる「ずらし」のテクニックは、子規を悲劇の主人公にしなかった。心の余裕すら感じる子規の視点の「ずらし」は、病気で苦しんでいる子規自身をも客観化するものだった。普通なら一番避けたい結核を意味するホトトギス（子規）を自分の号に選び、病気と共に生きた子規の周りにはいつも誰かがいた。そして、詩歌を作り、雑談をし、ご馳走を食べるという、病気が持つ暗さとは正反対の明るさが子規庵にはあった。子規はそうした暮らしぶりを「病気を楽しむ」と呼んだ。

子規は 22 歳の時に、当時は不治の病である肺結核になり、30 歳になるとほぼ寝たきりになってしまう。そして 35 歳という若さで死んでしまう。しかし、晩年の寝たきりの 5 年間が一番いい仕事をしている。文学の革新は言うに及ばず、死の 3 年前から中村不折にもらった水彩の絵の具で絵を描き始める。枕に頭を付けたまま、仰向けになって、画板に紙をはり、画板の方を動かしながら絵を描いた。絵を描くことは動けない子規にとっては無類の楽しみとなった。限られた空間しか目には入らぬが、通常ちょっと目には見えない細部が、寝たきりで寝返りすら打てない子規には見えてくる。四季の移り変わりにも敏感に反応し、しばし病気のことを忘れられる。動けない子規が見出した写生の喜び。彼の病室の前庭には日覆いのための糸瓜棚が設けてあったが、それを下から斜に見上げて、子規は写生をし、句を作った。その意味では、俳句や短歌、さらに文章の革新は子規にとっては、文学の革新というよ

り病気の気晴らしという側面を持っていた。

明治 35 年 9 月 19 日未明、子規は亡くなった。遺体を整えるために母は子規の肩を抱いて起こした。そして、松山弁で息子に語りかけた。「さあ、も一遍痛いというてお見」

島津信子先生（共通）のおすすめ

◆**『源氏物語』** 紫式部著 (918||K-1||9)他

◆**『熱帯雨林の彼方へ』** カレン・テイ・ヤマシタ著 白水社 (購入予定)

◆**『風と共に去りぬ』** ミッチェル著 集英社 (908||S-1||86～87)

◆**『グレート・ギャツビー』** スコット・フィッツジェラルド著 中央公論社 (933.7||F-6)

◆**『かもめ』** チェーホフ著 岩波書店 (081||I-4-5||622-1)

◆**『三人姉妹』** チェーホフ著 岩波書店 (081||I-4-5||622-4)

◆**『桜の園』** チェーホフ著 岩波書店 (081||I-4-5||622-5-2)

◆**『婉という女』** 大原富枝著 ※『昭和文学全集 19』(918.6||S-2||19)に収録

◆**『されど我らが日々』** 柴田翔著 文藝春秋 (913.6||S-2)

◆**『贈る言葉』** 柴田翔著 新潮社 (913.6||S-99 本館所蔵)

◆**『美徳のよろめき』** 三島由紀夫著 ※『三島由紀夫全集 10』(918.6||M-7||10 本館所蔵)に収録

◆**『夏子の冒険』** 三島由紀夫著 ※『三島由紀夫全集 7』(918.6||M-7||7 本館所蔵)に収録

◆**『貴族の階段』** 武田泰淳著 ※『武田泰淳全集 6』(918.6||T-10||6)に収録

◆**『森と湖の祭り』** 武田泰淳著 ※『武田泰淳全集 7』(918.6||T-10||7 本館所蔵)に収録

◆**『斜陽』** 太宰治著 ※『現代日本文学全集 49』(918.6||G-2||49)に収録

◆**『悲しみよこんにちは』** サガン 新潮社（購入予定）

◆**『ある微笑』** サガン著 新潮社（購入予定）

◆**『ブラームスはお好き』** サガン著 新潮社 (953.7||S-1)

◆**『坊ちゃん』** 夏目漱石著 新潮社 ※『新潮日本文学 3』(918.6||S-1||3)に収録

中川勝昭先生（共通）のおすすめ

◆**『赤と黒』** スタンダール著 (908||S-1||19)他

もし、小説を一つ挙げろと言われたら、私ならこれを推薦します。近代文学が自律化の道をたどるようになってから、「物語性」というものが軽視されるようになってしまいました。どんな精緻な心理描写も、わくわくさせるような出来事が伴わなければ退屈なだけです。その意味では、この小説はどちらも兼ね備えています。これを読んで、主人公から若者らしい野心を注入してもらってください。

訳書は、複数あるのでどれでも良いと思います。最近、光文社から新訳が出ました。私もまた読み直したいと思っています。

ご協力頂いた先生方に
感謝を申し上げます。

**【編集・発行】**
**九州工業大学附属図書館**
**情報工学部分館図書係**
**2008 年 1 月**
**tos-jhotosyo@jimu.kyutech.ac.jp**